

中学生の問題行動に関する研究(2) ——生活ストレスの構造について——

林 幸範

The Study on the Problem Behavior of the Junior High Students(2) —The Composition of the Stress in Daily Life—

HAYASHI Yukinori

The purpose of this study is to clarify the composition of the stress in the daily life of junior high school students in Japan. To achieve this, path analysis was carried out to understand the correlation between gender difference and age difference and the impact of the primary causes and factors (the number of respondents were 3,977 and the response rate was 91%).

The following conclusions were reached.

① Gender difference

- 1) In the category labeled "Self-described outline", there was a difference between males and females in the factors called "Good child self-image", "Clever child self-image", "Reserved child self-image" and "Irritable child self-image".
- 2) In the category labeled "Inconstant supplication", there was a difference between males and females in the factors called "Mental fatigue", "Physical fatigue" and "Extreme fatigue".
- 3) In the category labeled "Frequency of life events", there was a difference between males and females in the factors called "Relations with friends", "Relations with teachers" and "Relations with one's studies".
- 4) In the category labeled "Evaluation of life events", there was a difference between males and females in the factors called "Relations with one's family" and "Relations with one's studies".
- 5) In the category labeled "Stress countermeasures", there was a difference between males and females in the factors called "Actual countermeasures", "Negative countermeasures", "Positive countermeasures" and "Accumulative countermeasures".

② Age difference

- 1) In the category labeled "Self-described outline", there was a difference between males and females in the factors called "Good child self-image", "Reserved child self-image" and "Irritable child self-image".
- 2) In the category labeled "Inconstant supplication", there was a difference between males and females in the factors called "Mental fatigue", "Physical fatigue" and "Extreme fatigue".
- 3) In the category labeled "Frequency of life events", there was a difference between males and females in the factors called "Relations with friends", "Relations with teachers" and "Relations with one's studies".

studies”.

- 4) In the category labeled “Evaluation of life events”, there was a difference between males and females in the factors called “Relations with one’s family”, “Relations with teachers” and “Relations with one’s studies”.
- 5) In the category labeled “Stress countermeasures”, there was a difference between males and females in the factors called “Actual countermeasures”, “Negative countermeasures”, “Positive countermeasures”, “Professional countermeasures” and “Accumulative countermeasures”.
- ③ The results of the path analysis showed it to be evident that the category labeled “Frequency of life events” was a direct cause of the existence of those labeled “Inconstant supplication” and “Stress countermeasures”.

Keywords: Problem Behavior, the, Junior High Students, The Composition of the Stress in Daily Life, Gender & Age difference

キーワード：

1. はじめに

中学生の問題行動の原因を明確にするため、平成10年以来3年間全国規模調査を実施してきた。特に、平成10年度の調査では、問題行動の基本と考えられている生活ストレスを中心に調査を実施してきた。その結果、以下のような点が解明された¹⁾²⁾³⁾。

- ①自己概念では「よい子像」「できる子像」「ひかえめな子像」「いらつく子像」の4因子、不定愁訴では「精神的疲労状態」「身体的疲労状態」「重度な疲労状態」の3因子、ライフイベントの頻度とライフイベントに対する評価では「友人関係」「家族関係」「教師関係」「部活関係」「学業関係」、ストレス対処法では「具体的対処法」「消極的対処法」「積極的対処法」「専門家での対処法」「蓄積的対処法」の5因子が抽出された。

- ②ライフイベントの頻度とライフイベントに対する評価とのタイプの特徴は、『高群』では、友達が多い方とは思わないし、イライラの解消には時間がかかる方など、『普通群』では、明るく、行動力があり、物事を深く考える方など、『低群』では、明るい方ではないが、落ち着いており、物事を深く考える方など、『矛盾群』では、イライラ解消には時間がかからない方などである。

そこで、本研究では、中学生の問題行動と重要

な関連性がある生活ストレスの構造を明らかにするために、①生活ストレスの各要因(「自己概念」「不定愁訴」「ライフイベントの頻度」「ライフイベントの評価」「ストレスの対処法」)の因子の得点の性別・学年別の差の検討、②性別・学年別のパス構造について検討を加える。

なお、本論文は「思春期児童のストレス要因の分析とその対応に関する調査研究」の再分析である。

2. 方法

1) 調査対象

東京都の公立中学校3校、神奈川県国公立中学校9校、鹿児島県の公立中学校1校及び神奈川県のK病院の適応学級の中学生4,366名。

2) 調査方法

各学級で担任教師などから配布してもらい、調査票を記入後、その場で本人が封に入れ糊付けをしてから回収。

3) 調査時期

平成10年11月～12月

4) 回収率

有効回答数は、3,977名で、回収率は91.1%(各学年の有効回答数などは、表1参照)。

表1 中学生の学年別・性別の人数

		男子	女子	不明	計
1年生	人数	716	652	2	1,370
	%	(52.3%) [34.8%]	(47.6%) [34.2%]	(0.2%) [12.5%]	(100.0%) [34.4%]
2年生	人数	621	618	5	1,244
	%	(49.9%) [30.2%]	(49.7%) [32.3%]	(0.4%) [31.3%]	(100.0%) [31.3%]
3年生	人数	718	636	9	1,363
	%	(52.7%) [34.9%]	(46.7%) [33.4%]	(0.7%) [56.3%]	(100.0%) [34.3%]
全体	人数	2,055	1,906	16	3,977
	%	(51.7%) [100.0%]	(47.9%) [100.0%]	(0.4%) [100.0%]	(100.0%) [100.0%]

注) 数字は、上段の整数は回答数、
中段の少数は全体を母数とした%、
下段の小数は計を母数とした%

5) 分析

「自己概念」「不定愁訴」「ライフイベントの頻度」「ライフイベントに対しての評価」「ストレス対処法」の各因子間の得点の性別の差についてはF検定を実施後、t検定を実施し、学年別の差については男子・女子全体ごとに分散分析を実施後、Tukeyの検定を実施した。なお、「ライフイベントの頻度」「ライフイベントに対しての評価」「ストレス対処法」「不定愁訴」「自己概念」とも、『よくあった』『時々あった』『ほとんどなかった』『全くなかった』などの4段階評定とした。

さらに、生活ストレス構造を明確にするためにパス解析を実施した。なお、パス解析は、因果モデル検証のための解析である。そこで、モデルとしては、ラザルスの認知ストレス理論⁴⁾から図1のモデルを考え検証を実施した。なお、ラザルスの認知ストレス理論とは、「ストレス刺激―ストレスラーを自分の生存や自尊心の維持にとって脅

威であると知覚・認知(評価)をしてから、対応機制が発動されて、反応としての結果が生ずる」とする考え方である。図1のモデルでは、「ストレスの刺激」としては「ライフイベントの頻度」「(過去1年間の生活での出来事)」「知覚・認知」としては「ライフイベントの評価」「対応機制」としては「ストレスの対処法」「反応」としては「不定愁訴」を考えた。また、これらの要因に影響が強いといわれている「自己概念」の要因もモデルに加えた。さらに各学年・性別のモデル差についても検討をした。

3. 結果と考察

1) 各因子間の性別・学年別

①自己概念(表2参照)

表2は、自己概念の各因子の得点の性別・学年別の結果である。

その結果から、性別についてみると、「よい子像」では、『1年生』『全体』において女子よりも男子の得点の方が有意に高く、『2年生』において女子よりも男子の得点の方が有意な傾向があった。「できる子像」と「総合得点」では、各学年とも女子よりも男子の得点の方が有意に高かった。「ひかえめ子像」と「いらつく子像」では、『2年生』『3年生』『全体』において女子よりも男子の得点の方が有意に高かった。

学年別にみると、「よい子像」の男子と女子及び全体の全てにおいて『1年生―2年生』『1年生―3年生』で有意な差があり、学年を経る

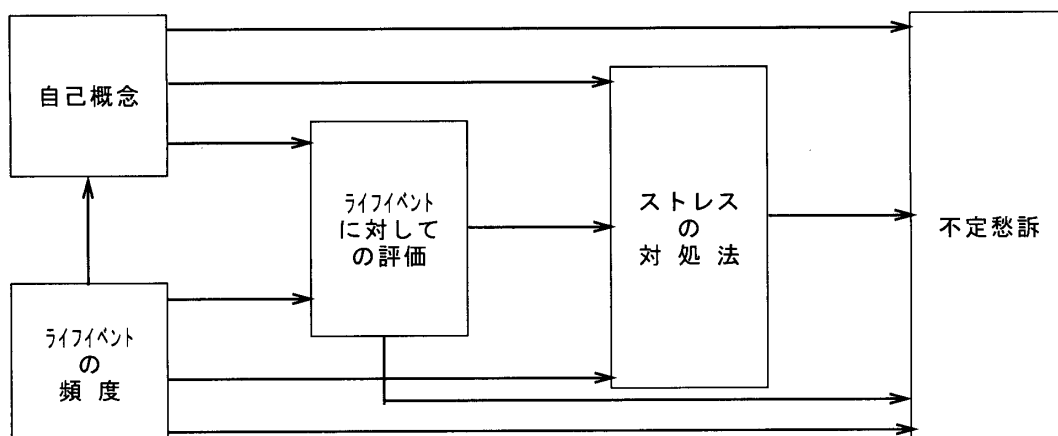


図1 ストレスの各要因の因果モデル

表2 性別・学年別の自己概念の各因子の得点

自己概念		1年生			2年生			3年生			全体		
		男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
よい子像 (6項目)	平均値	20.1	19.6	19.8	19.3	18.8	19.1	19.1	18.8	19.0	19.5	19.1	19.3
	標準偏差	5.02	4.57	4.82	5.05	4.49	4.79	5.17	4.62	4.94	5.10	4.57	4.87
	人数	694	634	1330	588	599	1192	701	616	1326	1983	1849	3848
	t検定	2.610:2.025*			5.583*:1.799+			4.466*:0.836			15.549*:2.680**		
できる子像 (5項目)	平均値	13.1	12.5	12.8	13.2	12.3	12.7	13.2	12.5	12.9	13.2	12.4	12.8
	標準偏差	4.40	4.04	4.24	4.41	3.79	4.13	4.48	3.97	4.30	4.43	3.94	4.23
	人数	699	637	1338	607	606	1218	706	628	1343	2012	1871	3899
	t検定	4.557*:2.674**			8.475*:3.512***			6.827*:3.250**			19.884*:5.449***		
ひかえめな子像 (5項目)	平均値	15.1	14.9	15.0	15.4	14.9	15.1	15.8	15.3	15.6	15.4	15.0	15.2
	標準偏差	3.92	3.30	3.63	3.68	3.13	3.44	3.87	3.39	3.67	3.84	3.28	3.60
	人数	694	633	1329	600	601	1206	706	629	1344	2000	1863	3879
	t検定	11.842*:0.882			8.762*:2.835*			7.720*:2.223*			32.473*:3.410**		
いらつく子像 (1項目)	平均値	2.9	2.9	2.9	3.0	2.8	2.9	3.1	3.0	3.1	3.0	2.9	3.0
	標準偏差	1.33	1.23	1.29	1.30	1.24	1.27	1.33	1.22	1.28	1.32	1.23	1.28
	人数	713	651	1366	617	614	1236	715	636	1360	2045	1901	3962
	t検定	4.498*:0.431			0.170:3.044**			10.664*:2.371*			8.478*:3.380**		
総合得点 (17項目)	平均値	51.3	49.9	50.6	51.0	48.9	50.0	51.2	49.6	50.6	51.2	49.5	50.4
	標準偏差	11.19	9.38	10.39	10.69	8.78	9.86	11.30	9.10	10.45	11.08	9.10	10.25
	人数	662	604	1268	566	579	1150	680	604	1293	1908	1901	3711
	t検定	9.066*:2.314*			10.230*:3.634***			16.255*:2.664**			35.797*:4.961***		

注) 1)「不明」は除く

2) t検定の数字は、F値:t値

3) Tukeyの検定では、1: 1年生、2: 2年生、3: 3年生

4) ***: p<0.001, **: p<0.01, *: p<0.05, +: p<0.1で有意

5) 項目の詳細については、引用文献 1)2)3)を参照

と得点が低くなる傾向がある。「できる子像」では全てにおいて有意な差がなかった。「ひかえめな子像」の男子では『1年生-3年生』、女子と全体では『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、学年を経ると得点が高くなる傾向がある。「いらつく子像」の男子では『1年生-3年生』、女子では『2年生-3年生』、全体では『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、学年を経ると得点が高くなる傾向がある。「総合得点」では全てにおいて有意な差がなかった。

②不定愁訴(表3参照)

表3は、不定愁訴の各因子の得点の性別・学年別の結果である。

その結果から、性別についてみると、「精神的疲労状態」「身体的疲労状態」「重度な疲労状態」の総ての因子及び「総合得点」において、女子の方が男子の得点の方が有意であった。

学年別にみると、「精神的疲労状態」の男子では『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、『1年生-2年生』で有意な傾向がみられ、女子と全体では『1年生-2年生』『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、学年を経るに従って得点が高くなる傾向がある。「身体的疲労」「重度な疲労状態」「総合得点」の男子と女子及び全体の全てにおいて『1年生-2年生』『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、学年を経ると得点が高く

表3 性別・学年別の不定愁訴の各因子の得点

不定愁訴		1年生			2年生			3年生			全体		
		男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
精神的疲労状態 (7項目)	平均値	17.2	18.0	17.6	17.8	19.1	18.5	18.8	20.1	19.4	18.0	19.1	18.5
	標準偏差	4.59	4.37	4.50	4.65	4.26	4.51	4.70	3.84	4.39	4.69	4.24	4.53
	人数	694	636	1332	600	604	1209	709	625	1343	2003	1787	3884
	t検定	1.670:-3.281**			4.549*:-4.975***			23.379*:-5.258***			21.509*:-7.560***		
身体的疲労状態 (7項目)	平均値	15.6	16.5	16.0	16.4	17.6	17.0	17.2	18.6	17.9	16.4	17.6	17.0
	標準偏差	4.78	4.41	4.62	4.92	4.42	4.72	4.89	4.26	4.68	4.90	4.45	4.73
	人数	695	637	1334	606	603	1214	706	631	1346	2007	1871	3894
	t検定	6.542*:-3.329**			7.431*:-4.430***			9.348*:-5.583***			19.865*:-7.553***		
重度な疲労状態 (4項目)	平均値	6.9	7.2	7.0	7.3	7.7	7.5	7.7	8.1	7.9	7.3	7.6	7.5
	標準偏差	2.41	2.22	2.33	2.67	2.25	2.49	2.66	2.42	2.58	2.60	2.33	2.49
	人数	703	643	1348	614	599	1218	707	634	1350	2024	1876	3916
	t検定	4.968*:-2.353*			12.530*:-2.352*			4.375*:-2.673**			18.474*:-4.201***		
総合得点 (18項目)	平均値	39.7	41.6	40.6	41.6	44.3	43.0	43.7	46.8	45.2	41.7	44.2	42.9
	標準偏差	10.14	9.55	9.90	10.77	9.44	10.24	10.65	8.69	9.98	10.64	9.46	10.21
	人数	671	615	1288	591	584	1180	693	620	1322	1955	1876	3790
	t検定	2.280:-3.534***			7.925*:-4.541***			21.697*:-5.665***			25.508*:-7.735***		

注) 1)「不明」は除く

2) t検定の数字は、F値:t値

3) Tukeyの検定では、1: 1年生、2: 2年生、3: 3年生

4) ***: p<0.001, **: p<0.01, *: p<0.05, +: p<0.1で有意

5) 項目の詳細については、引用文献 1)2)3)を参照

表4 性別・学年別のライフイベントの頻度の各因子の得点

ライフイベント の頻度	1年生			2年生			3年生			全体				
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計		
友人関係 (7項目)	平均値	11.6	12.0	11.8	11.8	11.9	11.8	12.0	11.9	11.9	11.8	11.9	11.8	男子:
	標準偏差	4.07	3.94	4.01	4.15	3.58	3.87	4.15	3.78	3.99	4.13	3.77	3.96	女子:
	人数	676	620	1298	587	583	1174	686	616	1311	1949	1819	3783	全体:
	t検定	1.270:-2.104*			5.421*:-0.356			3.260:0.385			9.910*:-1.206			
家族関係 (5項目)	平均値	10.9	11.0	11.0	11.4	11.1	11.2	11.3	11.2	11.3	11.2	11.1	11.2	男子: 1-2*, 1-3+
	標準偏差	3.71	3.62	3.67	3.78	3.69	3.75	3.77	3.65	3.72	3.75	3.65	3.71	女子:
	人数	676	628	1306	597	591	1193	693	620	1322	1966	1839	3821	全体: 1-3+
	t検定	0.160:-0.573			0.220:1.636			0.380:0.485			0.695:0.875			
教師関係 (3項目)	平均値	6.7	6.8	6.8	7.1	7.2	7.1	7.1	6.9	7.0	7.0	6.9	7.0	男子: 1-2* , 1-3*
	標準偏差	2.60	2.51	2.56	2.61	2.38	2.50	2.61	2.38	2.51	2.61	2.43	2.53	女子: 1-2* , 2-3+
	人数	694	637	1333	603	597	1205	695	627	1331	1992	1861	3869	全体: 1-2***, 1-3+
	t検定	0.600:-0.662			5.715*:-0.321			7.869*:-1.658+			11.987*:-0.340			
部活関係 (3項目)	平均値	6.5	6.7	6.6	6.1	6.2	6.2	6.0	5.8	5.9	6.2	6.2	6.2	男子: 1-2* , 1-3***
	標準偏差	2.48	2.70	2.59	2.44	2.49	2.47	2.54	2.48	2.52	2.49	2.59	2.54	女子: 1-2** , 1-3***, 2-3**
	人数	699	630	1331	594	594	1193	701	624	1334	1994	1848	3858	全体: 1-2***, 1-3***, 2-3**
	t検定	9.244*:-1.600			2.280:-0.859			0.670:1.554			11.576*:-0.528			
学業関係 (3項目)	平均値	8.3	8.6	8.5	8.4	8.8	8.6	9.0	9.4	9.2	8.6	9.0	8.8	男子: 1-3***, 2-3***
	標準偏差	2.17	2.07	2.13	2.21	2.07	2.16	2.18	1.96	2.10	2.21	2.06	2.15	女子: 1-3***, 2-3***
	人数	700	636	1338	606	603	1214	703	624	1336	2009	1863	3888	全体: 1-2+ , 1-3***, 2-3***
	t検定	0.910:-2.921**			2.900:-3.262**			1.680:-3.712***			10.924*:-5.534***			
総合得点 (20項目)	平均値	43.8	45.2	44.5	44.8	45.0	44.9	45.2	45.0	45.1	44.6	45.1	44.8	男子: 1-3+
	標準偏差	10.46	10.31	10.41	11.25	9.76	10.54	11.24	9.67	10.58	10.99	9.91	10.51	女子:
	人数	620	577	1199	536	544	1084	635	585	1229	1791	1706	3512	全体:
	t検定	0.030:-2.285**			5.636*:-0.337			10.653*:-0.295			11.366*:-1.341			

注) 1)「不明」は除く

2) t検定の数字は、F値:t値

3) Tukeyの検定では、1: 1年生、2: 2年生、3: 3年生

4) ***: p<0.001, **: p<0.01, *: p<0.05, +: p<0.1で有意

5) 項目の詳細については、引用文献 1)2)3)を参照

なる傾向がある。

③ ライフイベントの頻度(表4参照)

表4は、ライフイベントの頻度の各因子の得点の性別・学年別の結果である。

その結果から、性別についてみると、「友人関係」では、『1年生』において男子よりも女子の得点の方が有意に高かった。「家族関係」と「部活関係」では、各学年及び『全体』において男女間の差はなかった。「教師関係」では、『3年生』において男子よりも女子の得点の方が有意に高い傾向があった。「学業関係」では、各学年及び『全体』において男子よりも女子の得点の方が優位な差があった。「総合得点」では、『1年生』において男子よりも女子の得点の方が有意に高かった。

学年別にみると、「友人関係」では、総てにおいて優位な差はなかった。「家族関係」の男子では『1年生-2年生』で有意な差があり、『1年生-3年生』で有意な傾向があり、女子では優位な差がなく、全体では『1年生-3年生』で有意な傾向があり、学年を経ると得点が高くなる傾向がある。「教師関係」の男子では『1年生-2年生』『1年生-3年生』で有意な差があり、女子では『1年生-2年生』で有意な差があり、『2

年生-3年生』で有意な傾向があり、全体では『1年生-2年生』で有意な差があり、『1年生-3年生』で有意な傾向があり、学年を経るに従って得点が高くなる傾向がある。「部活動」の男子では『1年生-2年生』『1年生-3年生』で有意な差があり、女子と全体では『1年生-2年生』『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、学年を経ると得点が高くなる傾向がある。「学業関係」の男子と女子では『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、全体では『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、『1年生-2年生』で有意な傾向があり、学年を経るに従って得点が高くなる傾向がある。「総合得点」の男子では『1年生-3年生』で有意な傾向があり、学年を経るに従って得点が高くなる傾向があるが、女子や全体では有意な差はなかった。

④ ライフイベントに対しての評価(表5参照)

表5は、ライフイベントに対しての評価の各因子の得点の性別・学年別の結果である。

その結果から、性別についてみると、「友人関係」「教師関係」「総合得点」では、各学年及び『全体』において男子よりも女子の得点の方が有意に高かった。「家族関係」では、『2年生』『3

表5 性別・学年別のライフイベントに対する評価の各因子の得点

ライフイベント に対する評価	1年生			2年生			3年生			全体				
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	Tukeyの検定	
友人関係 (6項目)	平均値	13.0	13.6	13.3	12.6	14.0	13.3	13.1	13.9	13.4	12.9	13.8	13.4	男子：
	標準偏差	5.17	5.27	5.22	5.14	5.04	5.14	5.15	5.19	5.18	5.15	5.17	5.18	女子：
	人数	649	584	1234	555	536	1094	637	568	1214	1841	1688	3542	全体：*
	t検定	1.010:-2.052*			0.180:-4.562***			0.660:-2.593*			0.600:-5.240***			
家族関係 (4項目)	平均値	11.5	11.9	11.7	11.3	12.1	11.7	11.6	12.1	11.9	11.5	12.0	11.7	男子：
	標準偏差	4.19	4.25	4.23	4.16	4.31	4.25	4.15	4.34	4.25	4.17	4.30	4.24	女子：
	人数	647	600	1249	565	537	1106	650	576	1235	1862	1713	3590	全体：
	t検定	0.410:-1.480			0.360:-3.142**			1.790:-2.070*			1.941:-3.814***			
教師関係 (3項目)	平均値	8.0	8.5	8.2	7.9	8.8	8.4	8.7	9.5	9.1	8.2	8.9	8.6	男子：1-3***, 2-3***
	標準偏差	2.58	2.46	2.54	2.61	2.37	2.54	2.54	2.27	2.45	2.60	2.41	2.54	女子：1-2* , 1-3***, 2-3***
	人数	675	618	1295	585	577	1166	674	609	1291	1934	1804	3752	全体：1-3***, 2-3***
	t検定	1.620:-3.600***			8.313*:-6.409***			6.448*:-5.562***			19.149*:-8.731***			
部活関係 (3項目)	平均値	7.3	7.5	7.4	7.5	8.0	7.8	7.6	7.7	7.6	7.5	7.7	7.6	男子：
	標準偏差	2.90	2.87	2.88	2.93	2.77	2.87	2.89	2.82	2.86	2.91	2.82	2.87	女子：1-2*, 2-3+
	人数	664	613	1279	586	553	1143	652	588	1249	1902	1754	3671	全体：1-2*
	t検定	0.150:-1.312			4.299*:-3.12**			0.370:-0.203			2.905*:-2.638**			
学業関係 (3項目)	平均値	6.1	6.7	6.4	5.8	6.4	6.1	5.9	6.1	6.0	6.0	6.4	6.2	男子：1-2+
	標準偏差	2.45	2.72	2.60	2.33	2.63	2.50	2.65	2.67	2.66	2.49	2.68	2.59	女子：1-3***, 2-3*
	人数	669	602	1273	571	547	1122	664	581	1254	1904	1730	3649	全体：1-2* , 1-3***
	t検定	14.914*:-3.615***			18.108*:-4.139***			0.300:-0.921			28.941*:-4.906***			
総合得点 (20項目)	平均値	45.9	47.9	46.9	45.0	49.1	47.1	46.8	48.8	47.7	45.9	48.6	47.2	男子：2-3+
	標準偏差	13.32	13.43	13.41	13.74	13.08	13.57	13.79	12.99	13.49	13.62	13.17	13.49	女子：
	人数	580	531	1112	499	488	990	583	532	1123	1662	1551	3225	全体：
	t検定	0.170:-2.604**			1.970:-4.740***			1.660:-2.503*			1.799:-5.627***			

注) 1)「不明」は除く

2) t検定の数字は、F値:t値

3) Tukeyの検定では、1: 1年生、2: 2年生、3: 3年生

4) ***: $p < 0.001$, **: $p < 0.01$, *: $p < 0.05$, +: $p < 0.1$ で有意

5) 項目の詳細については、引用文献 1)2)3)を参照

年生』『全体』において男子よりも女子の得点の方が有意に高かった。「部活関係」では、『2年生』『全体』において男子よりも女子の得点の方が有意に高かった。「学業関係」では、『1年生』『2年生』『全体』において男子よりも女子の得点の方が有意に高かった。

学年別にみても、「友人関係」「家族関係」では、全てにおいて有意な差がなかった。「教師関係」の男子では『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、女子では『1年生-2年生』『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、全体では『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、学年を経るに従って得点が高くなる傾向がある。「部活関係」の男子では有意な差がなく、女子では『1年生-2年生』で有意な差が、『2年生-3年生』で有意な傾向があり、全体では『1年生-2年生』で有意な差があり、学年を経ると得点が高くなる傾向がある。「学業関係」の男子では『1年生-2年生』で有意な傾向があり、女子では『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、全体では『1年生-2年生』『1年生-3年生』で有意な差があり、学年を経るに従って得点が低くなる傾向がある。「総合得点」の男子では『2年生-3年生』で有意な傾向があり、学年を経る

に従って得点が高くなる傾向があり、女子と全体では有意な差がなかった。

⑤ ストレス対処法(表6参照)

表6は、ストレス対処法の各因子の得点の性別・学年別の結果である。

その結果から、性別についてみると、「具体的対処法」では、『全体』において女子よりも男子の得点の方が有意に高かった。「消極的対処法」「積極的対処法」「総合得点」では、各学年及び『全体』において女子よりも男子の得点の方が有意に高かった。「専門家での対処法」では、各学年及び『全体』において女子男子間の得点には有意な差がなかった。「蓄積的対処法」では、『1年生』『2年生』『全体』において女子よりも男子の得点の方が有意に高かった。

学年別にみても、「具体的対処法」では、全てにおいて有意な差がなかった。「消極的対処法」の男子では『1年生-3年生』で有意な差が、『1年生-2年生』『2年生-3年生』で有意な傾向があり、女子では『1年生-2年生』『1年生-3年生』で有意な差が、『2年生-3年生』で有意な傾向があり、全体では『1年生-2年生』『1年生-3年生』『2年生-3年生』で有意な差があり、学年を経るに従って得点が低くなる傾向がある。「積極的対処法」の男子では『2年生-3

表6 性別・学年別のストレス対処法の各因子の得点

ストレス対処法		1 年生			2 年生			3 年生			全体		
		男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
具体的対処法 (4 項目)	平均値	9.9	9.6	9.8	9.7	9.4	9.5	9.6	9.5	9.6	9.7	9.5	9.6
	標準偏差	3.11	3.05	3.08	3.21	2.92	3.07	3.19	2.92	3.07	3.17	2.97	3.08
	人数	703	648	1353	607	603	1215	709	624	1342	2019	1875	3910
	t 検定	0.000:1.432			4.167*:1.441			5.439*:0.660			6.472*:2.046*		
消極的対処法 (5 項目)	平均値	16.5	16.0	16.3	16.0	15.3	15.7	15.6	14.9	15.3	16.0	15.4	15.7
	標準偏差	3.56	3.30	3.45	3.78	3.33	3.59	3.76	3.25	3.57	3.72	3.32	3.56
	人数	700	645	1347	600	600	1205	710	620	1339	2019	1865	3891
	t 検定	3.350:2.476*			5.880*:3.452**			11.206*:3.404**			14.179*:5.280***		
積極的対処法 (3 項目)	平均値	5.6	4.4	5.0	5.9	4.3	5.1	5.6	4.2	4.9	5.7	4.3	5.0
	標準偏差	2.06	1.98	2.11	1.97	2.03	2.15	2.10	1.98	2.15	2.05	2.00	2.14
	人数	705	643	1350	609	603	1217	709	625	1343	2010	1871	3910
	t 検定	3.010:10.853***			0.910:13.668***			7.077*:11.999***			4.678*:20.940***		
専門家での対処法 (2 項目)	平均値	7.6	7.5	7.6	7.4	7.4	7.4	7.3	7.4	7.3	7.4	7.5	7.4
	標準偏差	0.89	0.93	0.91	1.20	0.98	1.11	1.24	1.06	1.18	1.12	0.99	1.07
	人数	707	649	1358	609	605	1219	710	627	1346	2026	1887	3923
	t 検定	2.700:1.068			9.619*:-1.559			5.775*:-0.473			6.515*:-0.666		
蓄積的対処法 (2 項目)	平均値	5.5	5.3	5.4	5.6	5.4	5.5	5.4	5.3	5.3	5.5	5.3	5.4
	標準偏差	1.49	1.48	1.49	1.57	1.46	1.52	1.57	1.45	1.52	1.54	1.46	1.51
	人数	707	647	1356	607	602	1214	709	626	1344	2023	1875	3914
	t 検定	0.000:2.667**			4.970*:2.009*			2.740:0.540			5.730*:2.945**		
総合得点 (16 項目)	平均値	45.1	42.9	44.1	44.5	41.9	43.2	43.4	41.3	42.4	44.3	42.1	43.2
	標準偏差	7.31	6.70	7.11	8.22	6.32	7.47	8.08	6.54	7.55	7.89	5.56	7.41
	人数	689	629	1320	592	592	1189	700	609	1318	2023	1875	3827
	t 検定	4.348*:5.562***			17.413*:6.031***			19.365*:5.125***			37.670*:9.541***		

注) 1) 「不明」は除く
 2) t 検定の数字は、F 値:t 値
 3) Tukey の検定では、1: 1 年生、2: 2 年生、3: 3 年生
 4) ***: $p < 0.001$, **: $p < 0.01$, *: $p < 0.05$, +: $p < 0.1$ で有意
 5) 項目の詳細については、引用文献 1)2)3) を参照

年生』で有意な差が、『1 年生－2 年生』では有意な傾向があり、学年を経るに従って得点が高くなる傾向があるが、女子と全体では有意な差がなかった。「専門家での対処法」の男子と全体では『1 年生－2 年生』『1 年生－3 年生』で有意な差があり、女子では『1 年生－3 年生』で有意な差があり、学年を経るに従って得点が低くなる傾向がある。「蓄積的対処法」の男子では『1 年生－3 年生』『2 年生－3 年生』で有意な傾向があり、女子では優位な差がなく、全体では『2 年生－3 年生』で有意な傾向がある。「総合得点」の男子では『1 年生－3 年生』『2 年生－3 年生』で有意な差があり、女子では『1 年生－2 年生』『1 年生－3 年生』で有意な傾向があり、男子では『1 年生－2 年生』『1 年生－3 年生』『2 年生－3 年生』で有意な傾向があり、学年を経るに従って得点が低くなる傾向がある。

2) パス解析

①全体(図2 参照)

図2 は、生活ストレスに関する各因子間の因果性を解明するために実施したパス解析の全体の結果である。

この結果から、「ライフイベントに対しての評価」と「ライフイベントの頻度」とは強い因果性

があり、逆に「自己概念」との因果性が弱いと考えられる。「ストレスの対処法」においては、「自己概念」「ライフイベントの頻度」「ライフイベントに対しての評価」との因果性があると考えられる。「不定愁訴」では、「自己概念」「ライフイベントの頻度」「ストレスの対処法」の因果性があり、特に「ライフイベントの頻度」「ストレスの対処法」とは強い因果性があり、逆に「ライフイベントに対しての評価」との因果性が弱いと考えられる。さらに、「ライフイベントの頻度」は、「自己概念」との因果性があると考えられる。

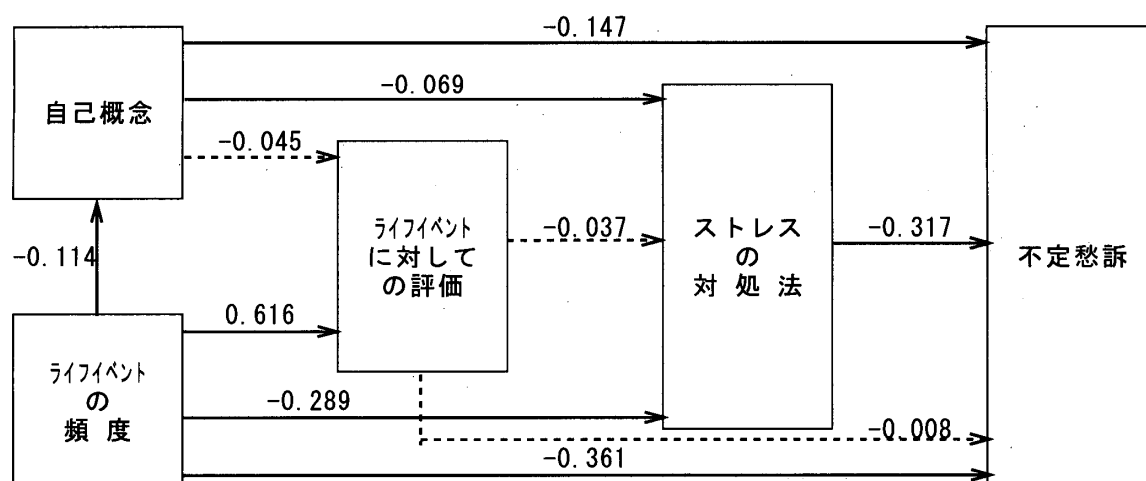
性別にみると、全体と異なるのは、男女ともに「ストレスの対処法」と「ライフイベントに対しての評価」とに因果性が弱いと考えられる点である。また、男女間で差があるのは、「ライフイベントの頻度」と「自己概念」との因果性が逆になっていると考えられる点である。

②1 年生(図3 参照)

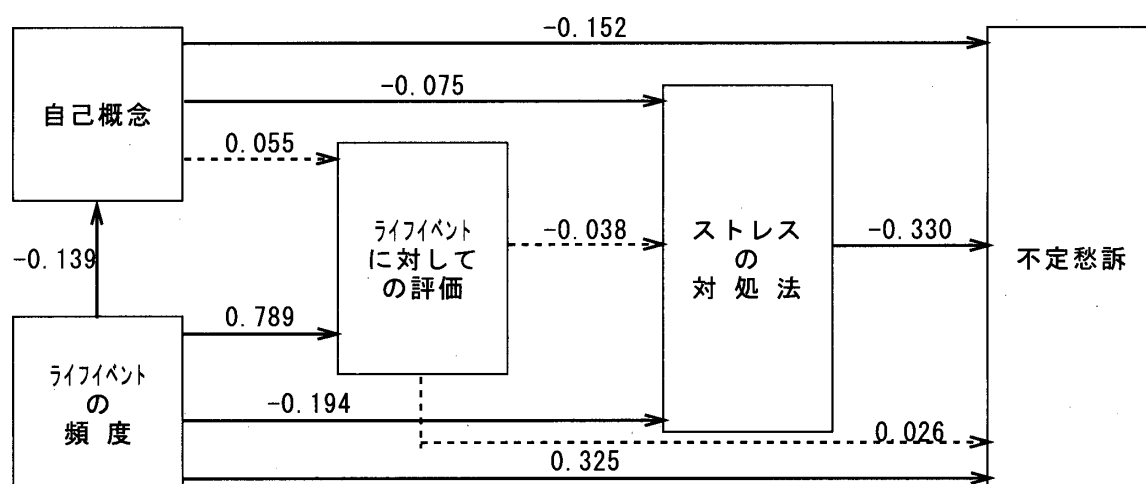
図3 は、生活ストレスに関する各因子間の因果性を解明するために実施したパス解析の中学1 年生についての結果である。

この結果から、1 年生においては、中学生と同じ因果性がみられた。

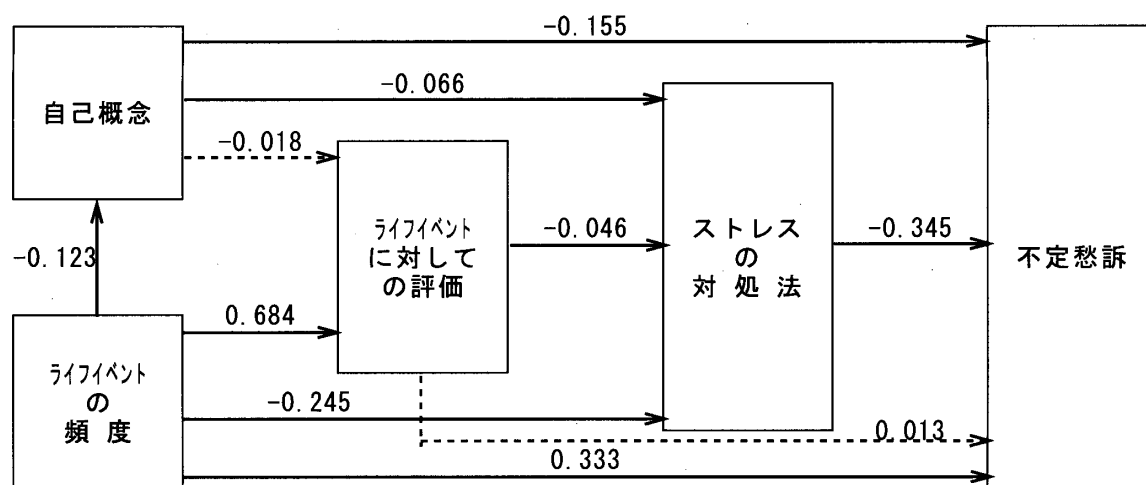
性別にみると、全体と異なるのは、男子と女子ともに「ストレスの対処法」と「ライフイ



[男子]



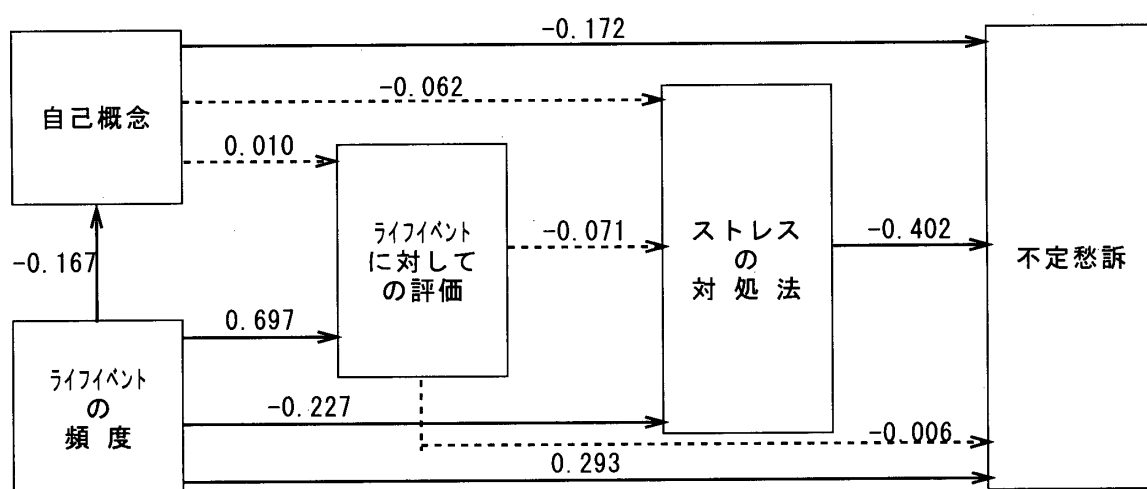
[女子]



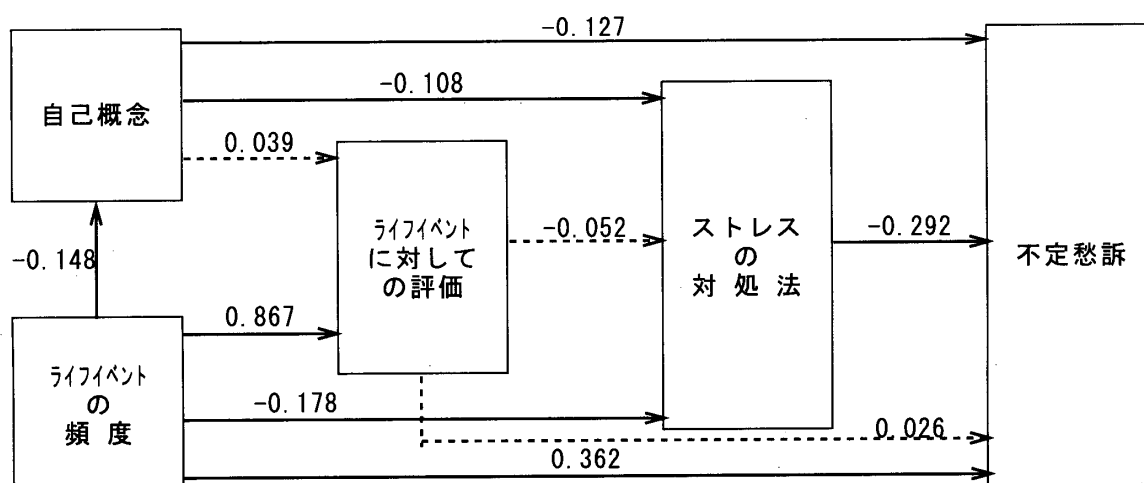
[全体]

注) →は、 $p < 0.001$ 、---→は、NS

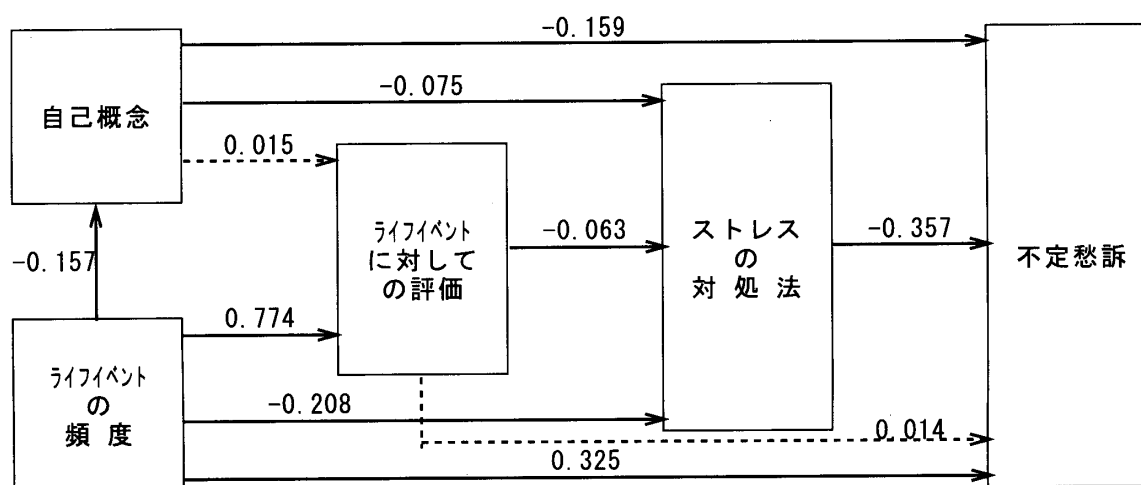
図2 ストレスの各要因のパス解析の結果



〔男子〕



〔女子〕



〔全体〕

注) \rightarrow は、 $p < 0.001$ 、 $---$ は、NS

図3 中学1年生のストレスの各要因のパス解析の結果

ントに対しての評価」とに因果性が弱いと考えられる点と、男子では「ストレスの対処法」と「自己概念」とに因果性が弱いと考えられる点である。また、男女間で差があるのは、「ストレスの対処法」と「自己概念」との因果性が男子ではあるが女子では弱いと考えられる点と、「不定愁訴」と「ストレスの対処法」との因果性が男子よりも女子の方が弱いと考えられる点である。

③ 2年生(図4参照)

図4は、生活ストレスに関する各因子間の因果性を解明するために実施したパス解析の中学2年生についての結果である。

この結果から、「ライフイベントに対しての評価」と「ライフイベントの頻度」とは強い因果性があり、逆に「自己概念」との因果性が弱いと考えられる。「ストレスの対処法」においては、「自己概念」「ライフイベントの頻度」との因果性があり、逆に「ライフイベントに対しての評価」との因果性が弱いと考えられる。「不定愁訴」では、「自己概念」「ライフイベントの頻度」「ストレスの対処法」の因果性があり、特に「ライフイベントの頻度」との因果性が強く、逆に「ライフイベントに対しての評価」との因果性が弱いと考えられる。さらに、「ライフイベントの頻度」は、「自己概念」との因果性があると考えられる。

性別にみても、全体と異なるのは、男女ともに「ストレスの対処法」と「自己概念」とに因果性が弱いと考えられる点と、「ライフイベントの頻度」と「自己概念」とに因果関係が弱いと考えられる点、男子では「不定愁訴」と「自己概念」とに因果性が弱いと考えられる点である。また、男女間で差があるのは、「不定愁訴」と「自己概念」との因果性では男子ではあるが女子では弱いと考えられる点と、「不定愁訴」と「ストレスの対処法」との因果性では男子よりも女子の方が弱いと考えられる点と、「不定愁訴」と「ストレスの対処法」との因果性では女子よりも男子の方が弱いと考えられる点である。

④ 3年生(図5参照)

図5は、生活ストレスに関する各因子間の因果性を解明するために実施したパス解析の中学3年

生についての結果である。

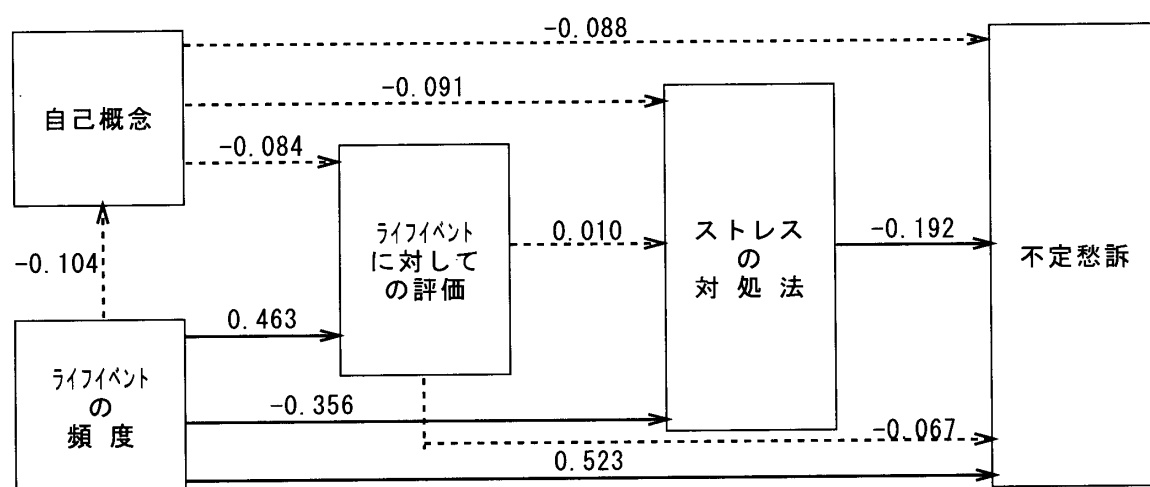
この結果から、「ライフイベントに対しての評価」と「ライフイベントの頻度」とは強い因果性があり、逆に「自己概念」との因果性が弱いと考えられる。「ストレスの対処法」においては、「ライフイベントの頻度」「ライフイベントに対しての評価」とに因果性があり、逆に「自己概念」との因果性が弱いと考えられる。「不定愁訴」では、「自己概念」「ライフイベントの頻度」「ストレスの対処法」の因果性があり、特に「ストレスの対処法」との因果性が強く、逆に「ライフイベントに対しての評価」との因果性が弱いと考えられる。さらに、「ライフイベントの頻度」は、「自己概念」との因果性があると考えられる。

性別にみても、全体と異なるのは、男子と女子ともに「ストレスの対処法」と「ライフイベントに対しての評価」とに因果性がないと考えられる点と、男子では「ライフイベントの頻度」と「自己概念」とに因果性がないと考えられる点である。また、男女間で差があるのは、「ライフイベントの頻度」と「自己概念」との因果性が男子ではないが女子ではあると考えられる点である。

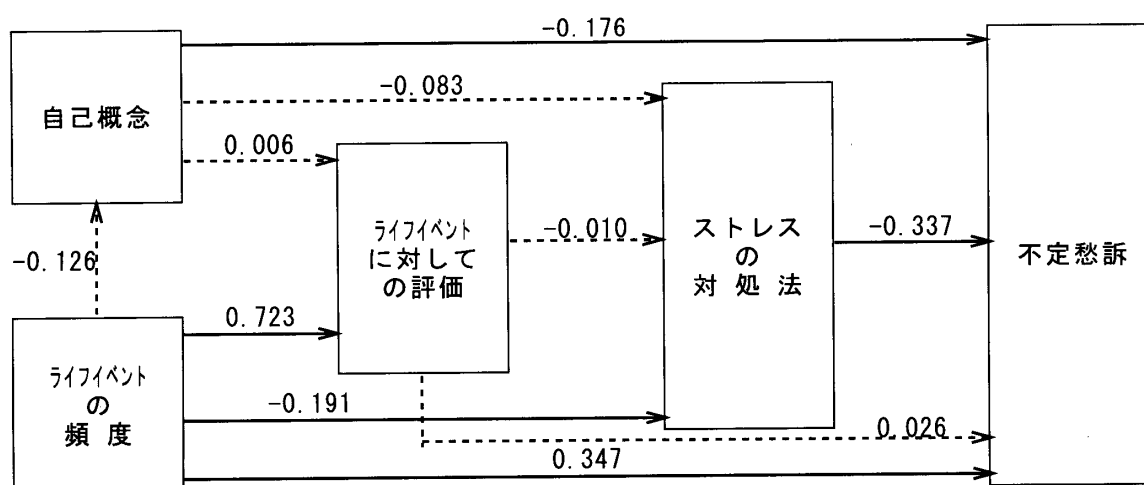
4. 結語

以上のことから、生活ストレスの構造について以下のような点が明確となった。

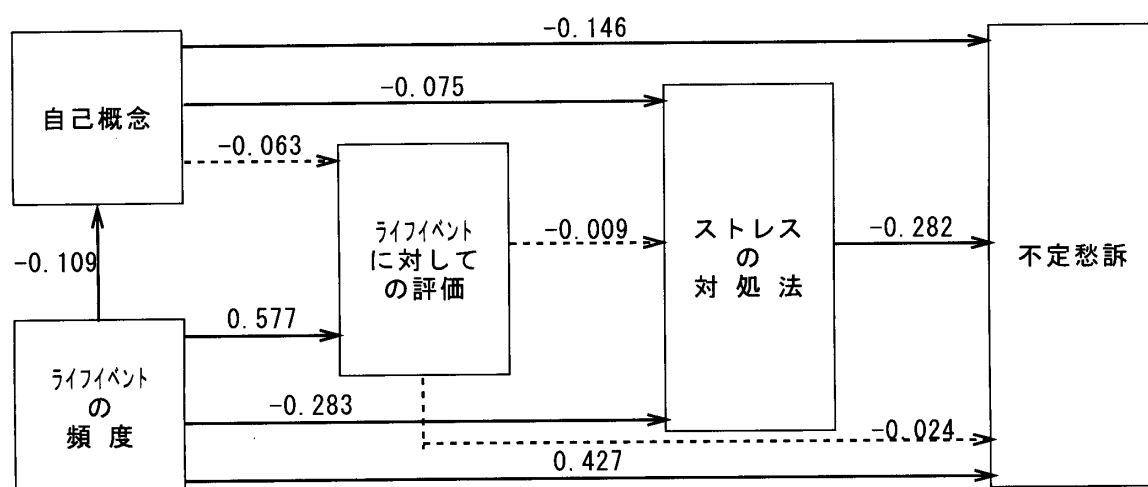
- ①「自己概念」では、特に『2年生』に男女差が多くみられた。学年別では、特に「よいこ子像」に学年差がみられ、「できる子像」では、学年ごとに男女差がみられた。
- ②「不定愁訴」では、各因子において各学年とも性差がみられた。学年別の差も各因子間にみられ、学年ごとに男女差もみられた。
- ③「ライフイベントの頻度」では、「学業関係」では各学年とも男女差がみられ、その他に『1年生』では「友人関係」「総合得点」に男女差がみられた。学年別では、「友人関係」で学年差がみられなかったが、それ以外の因子では学年差がみられ、学年ごとに男女差がみられたのは、「部活関係」「学業関係」などであった。



〔男子〕



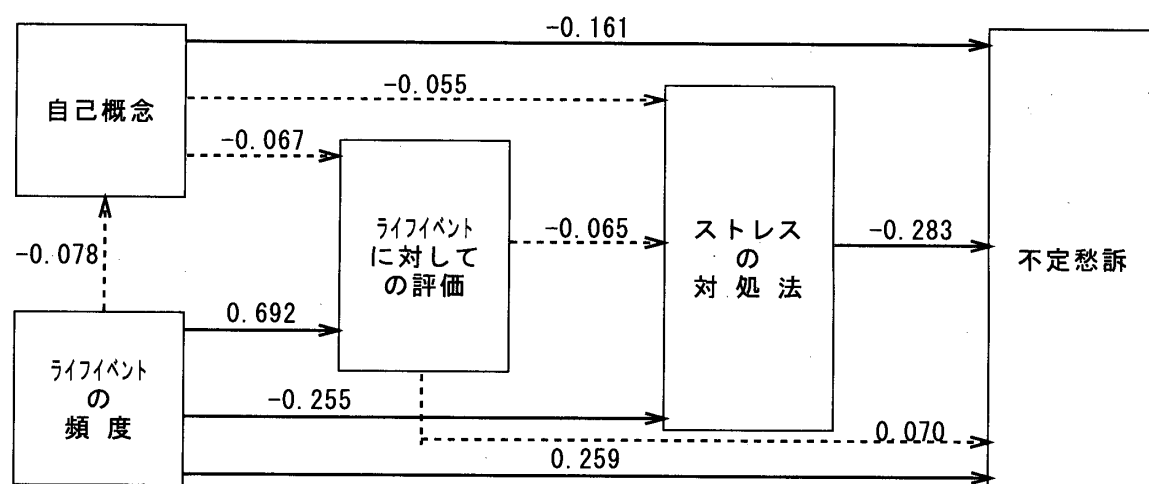
〔女子〕



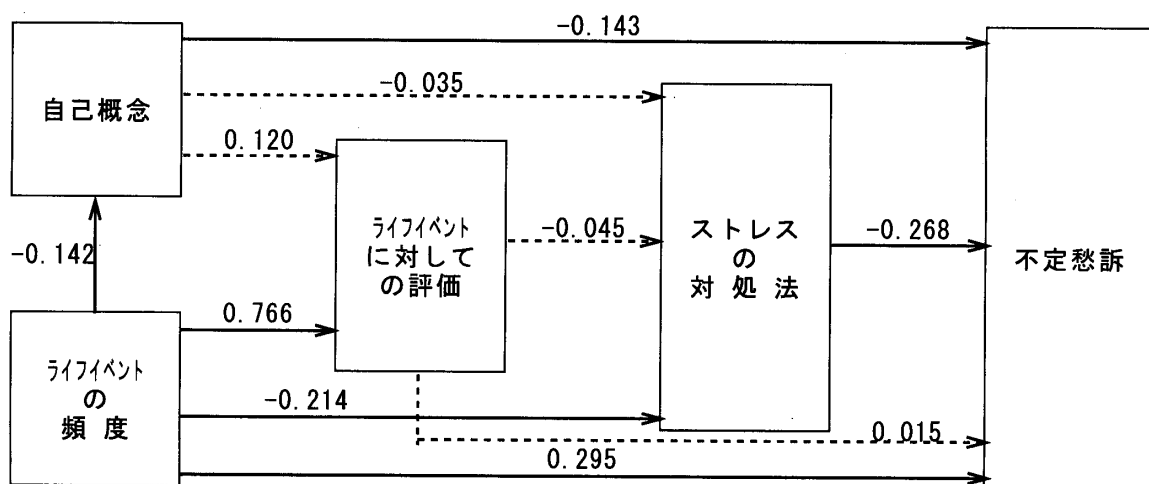
〔全体〕

注) → は、 $p < 0.001$ 、---→ は、NS

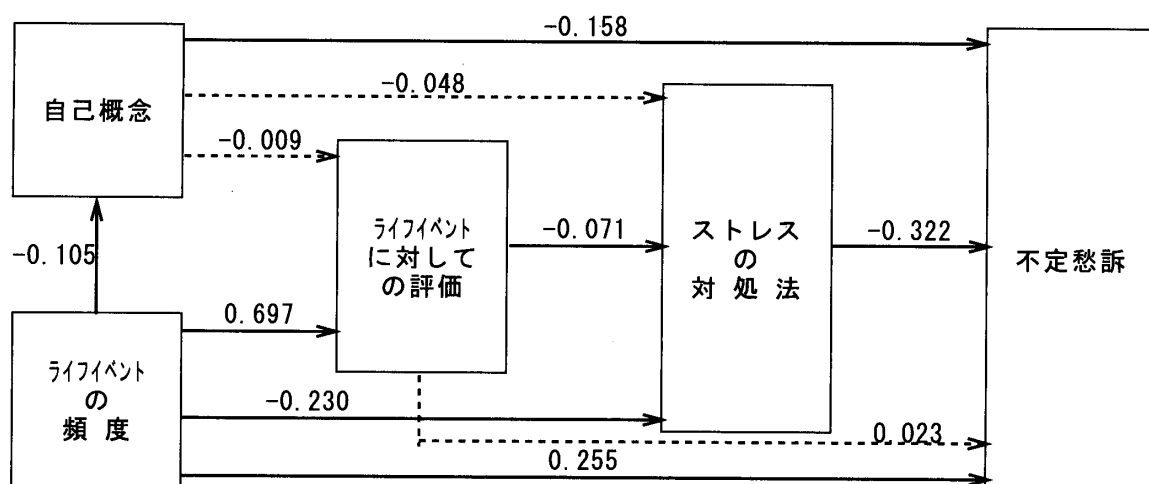
図4 中学2年生のストレスの各要因のパス解析の結果



[男子]



[女子]



[全体]

注) → は、 $p < 0.001$ 、---→ は、NS

図5 中学3年生のストレスの各要因のパス解析の結果

- ④「ライフイベントに対しての評価」では、「友人関係」「教師関係」「総合得点」では各学年とも男女差がみられ、その他では『2年生』では「部活関係」「家族関係」にも男女差がみられた。学年別では、特に「教師関係」に学年差がみられ、「友人関係」「総合得点」などでは学年ごとに男女差がみられた。
- ⑤「ストレスの対処法」では、「消極的対応法」「積極的対応法」「総合得点」では各学年とも男女差がみられ、その他では「蓄積対応法」では『1年生』『2年生』にも男女差がみられた。学年別では、特に「消極的対応法」では学年差がみられ、「積極的対応法」「総合得点」などでは学年ごとに男女差がみられた。
- ⑥パス解析の結果、生活ストレスの構造としては、ライフイベントの頻度－ストレッサーが直接的に対処法や不定愁訴などの原因になっていると考えられる。しかも、この傾向は、学年を経るに従って弱くなる傾向がある。
- ⑦性別・学年別のパス解析の結果、以下のようであった。
- 1) 中学1年生では、基本的には全体同様の傾向だが、男子と女子ともに「ライフイベントに対する評価」が「ストレスの対処法」の原因になりにくい。
 - 2) 中学2年生では、基本的には全体同様の傾向だが、「ライフイベントに対する評価」が「ストレスの対処法」の原因になりにくく、男女とも「自己概念」が「ストレスの対処法」の原因になりにくく、「ライフイベントの頻度」が「自己概念」の影響に要因になりにくい。
 - 3) 中学3年生では、基本的には全体同様の傾向だが、「自己概念」が「ストレスの対処法」の原因になりにくく、男女ともに「ライフイベントに対する評価」が「ストレスの対処法」の原因になりにくい。

これらのことから、生活ストレス構造には、基本的には、ライフイベントの頻度－ストレッサーが直接的に不定愁訴などの原因になっており、ストレスの刺激を認知し、対応規制が働くというラ

ザルスのストレス認知モデルとは、異なる傾向性が示唆された。さらに、ストレスの対処法を誤ると不定愁訴が発現する傾向性もみられた。しかしながら、生活ストレスの構造には、性差や学年差がみられ、特に男子よりも女子では、自己概念が不定愁訴に与える影響は強い。また、ライフイベントの頻度が不定愁訴に与える影響は女子では、学年を経るに従って弱くなってきているなどがみられた。

以上のことなどから、今後の問題点としては、①中学生の生活構造との関連性、②各因子間の構造の解明、③規範意識と生活ストレス構造・社会的要因などとの関係性の明確化などがあげられる。

引用文献

- 1)「思春期児童のストレス要因の分析とその対応に関する調査研究」平成10年度児童環境づくり等総合研究事業研究報告、厚生省、1999
- 2)林幸範「中学生のストレスに関する研究－ストレスの構造を中心に－」児童研究、78：11－23、1999
- 3)林幸範「中学生の問題行動に関する研究（1）－ライフイベントの頻度と評価のタイプとの関係性について－」鎌倉女子大学紀要、10：85－94、2003
- 4)林幸範「人間理解のための社会・心理学」学芸図書株式会社、1991

要旨

本研究は、中学生の生活ストレスの構造を明らかにするために各構成要因の因子間の性差・学年差、相関及びパス解析などを実施した（有効回答数：3,977名、回収率：91.7%）。その結果、以下のような結果が得られた。

- ①性別では、
 - 1)「自己概念」では、『よい子像』『できる子像』『ひかえめな子像』『いらつく子像』の因子間に男女差があった。
 - 2)「不定愁訴」では、『精神的疲労状態』『身体的疲労状態』『重度な疲労状態』の因子間に男女差があった。

- 3) ライフイベントの頻度, 『友人関係』『教師関係』『学業関係』の因子間に男女差があった。
- 4) ライフイベントの評価, 『家族関係』『学業関係』の因子間に男女差があった。
- 5) ストレスの対処法, 『具体的対処法』『消極的対処法』『積極的対処法』『蓄積的対処法』の因子間に男女差があった。

②学年別では,

- 1) 「自己概念」では, 『できる子像』『ひかえめな子像』『いらつく子像』の因子間に学年差があった。
- 2) 「不定愁訴」では, 『精神的疲労状態』『身体的疲労状態』『重度な疲労状態』の因子間に学年差があった。
- 3) ライフイベントの頻度, 『友人関係』『教師関係』『学業関係』の因子間に学年差があった。
- 4) ライフイベントの評価, 『家族関係』『教師関係』『学業関係』の因子間に学年差があった。
- 5) ストレスの対処法, 『具体的対処法』『消極的対処法』『積極的対処法』『専門家での対処法』『蓄積的対処法』の因子間に学年差があった。

- ③なお, パス解析の結果, 「ライフイベントの頻度」が直接「不定愁訴」や「対処法」の原因となっていることなどが分かった。

(2003. 10. 21 受稿)